

ウソつき怪談のススメ

笹貫 満

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

女子高校生のみっちゃんとりっちゃんが学校やら近所やらに出没する怪異に青くなったり、笑ったりするお話。

ハートフル？青春ストーリー、ここにて開幕！

一話完結のため何処からでもお読み頂けます。

この短編小説はフィクションです。実在の人物や団体などとは一切関係ありません。

※→「現代」をモデルにした小説なので一応、書かせていただきます。

目次

| | | |
|---|-----------------|----|
| 壹 | 唆されたカイダン | 1 |
| 弐 | 時間を間違えると吉 | 6 |
| 参 | 9割はこうして失敗した | 11 |
| 肆 | 運命の人との出会い方 | 16 |
| 伍 | 十円玉の使い道 | 21 |
| 陸 | エレベーターでちよつとそこまで | 26 |

壺 唆されたカイダン

同じクラスのみつちゃんはウソつきだ。

彼女はミハルだかミサトだかホントのところは知らないが、みつちゃんだなんて渾名からもわかるように所謂『陽キャ』な人間で、教室の片隅で本を読んでいるような私とは根本的にタイプが違った。

そのため、私たちはこれまで大した接点もないまま過ごしてきたのだが、彼女のこのとんでもない悪癖を知ったのはちようど一年ほど前のことだった。

その日、運悪く体力テストを欠席していた私は再テストを受けに体育館へ向かっていた。

外は生憎の土砂降りだったので五十メートル走やらハンドボール投げやらの面倒な種目はまた後日に開催されるらしい。億劫だなどは思ったものの、結局恨むべきは自分の風邪である。

むしろ、この再テストの機会さえも失うことの方が怖ろしいだろう。広い体育館で、これといって親しいわけでもない体育教師と二人ぼっちで測定するのはどうにも気が重いだらうから。

同じく運悪く体力テストを欠席したらしいみつちゃんと同じ学年だということと一緒に並ばされたのが、何だか少し気まずく思っ、彼女に軽く挨拶をしてからは俯いていた。

みつちゃんの背は私の十センチ程上なので、目線が交わることはまづ無いのだけれど。

因みに、私は友人からお婆ちゃんと揶揄される通りに体育は大の苦手である。別にそのあだ名は運動音痴から取られたわけでもないのだが、ぴたりとハマっているので訂正しようにも中々出来ないでいる。

やっぱり身体を動かす度に腰は痛むし、足は軋むのを感じた。恐らく、明日の筋肉痛から逃れることは叶わないだろう。どうにも不運

だ。まあ、日頃の運動不足が祟ったのだらうから自業自得だと早々に諦めてしまった。

上体起こしやシャトルラン、反復横跳びの都合上、みっちゃんとペアになったので知っているが、彼女は一つ括りの髪を揺らしながら軽く私の倍をこなしていた。

運動音痴の私とはえらい違いである。

そんなこんなで室内種目は全て終わったので、後は帰るのみである。

後片付けやらなんやらでそうこうしているうちに夕暮れ時が迫っていて、黄赤色の光が窓を照らす。早く帰ってしまわないと明日朝は寝坊する羽目になるなあと手早く室内履きをくつ袋にしまった。

二十時に寝て、三時に起きる生活は結構慌ただしいのだ。

「一緒に帰ろうか」

そんなみっちゃんの声に振り返る。それを諾して並び歩いた。

「ねえ知ってる？階段の段数」

体育館から地上へと伸びる階段は途轍もなく長くて、不養生な私はいつも息絶え絶えになるのが常だ。

そのせいで、私は昼休み直後の三限目体育がとても嫌いだったりする。食べ物を胃の中へ入れたせいで脇腹がつきつきと痛くなるし、この階段は勾配が大きいものだから、重心を後ろにしないと、こけた時に派手に顔面ダイブする羽目になるからだ。

「いやあ、長いのは知っているけれど」

「百四十八段あるんだよ」

「え、そんなにあるんだ。それは私が辟易するのも仕方ないや」

「じゃあ、今日は不運だね」

不穏な発言をされたので何故と返す。

そうするとみっちゃんは事も無げに一段増えてしまうからと返した。そんな事は建物の都合上ありえないオハナシだ。

私の頭の上にはハテナが浮かんでいたのだらう。

みっちゃんは提案した。

「じゃあ、丁度いいから数えてみようよ。気になるでしょ？」

疑問が残ったまま帰宅するのも釈然としなかったので、数えながら帰ることにしようかとその提案を呑む。

一段、二段、三段。

長い階段を数える間、無言なのもイヤな感じであるし、どうにも愛想がないだろうと思ったものだから、その間にぼつぼつと学校でのこと、先生の面白かった話を話していった。

例えば、部活で育てていた二匹の金魚が死んだこと。

一昨年の四月に飼い始めたのでシガツとフールと名付けて可愛がっていたのだけれど。

もしかしたら、名前が気に入らなかったのかもしれない。四月馬鹿だから、という理由でシガツとバカにしようとしたものの、片方がバカになるのは流石にかわいそうだったので、エイプリルフールのフルにしたのだ。けれど、フールも愚者という意味を持つのだとつい最近になって知った。

それとも、実験が肌に合わなかったのだろうか。もう既に金魚の供養碑には色々と埋められている。血も涙もない実験だと陰で噂もされていた。

例えば、生物を教える笹本先生のこと。

程よく炭酸が抜けたソーダみたいな優しい先生で、可愛らしいインコを飼っているのだとよく自慢をしてくれる。授業一コマで出来るだけ多く、もつと言えば全員当てることを目標としているようで、授業中によく当たること。

間違えてもフォローが上手い先生なものだから、あまり緊張感はないこと。

長い階段の合間合間にした話のラリーは意外と長く続いた。

「ところでさあ。なんで一段増えてしまうのだろうね」

「帰らないんで欲しいんじゃないの」

だってほら、百四十九つと。

彼女はそう数えながらくるりと振り返る。

奇しくも最後の段だった。

「ほら、今つて丁度、逢魔が時なんだから。その辺の低級に唆されて理性を手放しちゃうんだよ。生徒を帰したくないな、まだまだ一緒に遊びたいなって」

「それは不穩だなあ」

橙色の光に包まれる。

急に恐ろしくなって残りの一段を数えながらみっちゃんに並んだ。その私の挙動不審さが笑いを誘ったのか、みっちゃんは大笑いし出す。

「なあに笑ってるの！ 君は失礼だなあ」

少し顔が青ざめているのが自分でわかる。

だって、本当に一段増えていたのだ。

そうしてもだもだしていると、みっちゃんが衝撃的なことを言った。

「ウソだよ」

「は？」

「だから、ウソ」

「どこからどこまで？」

「二段増えるなんてないよ、その階段は元々百四十九段あるの。知らないみたいだからついついからかつちゃった」

そう言つて、てへつと笑うみっちゃんは憎らしい程にいい笑顔をしていた。

「なあんだ。びっくりしちゃったよ」

「あはは、ごめんつて」

「すっかり引つかかってしまったね」

「ありえないでしょー、建物がそんな感情を持つとか、段数が増えるだとか」

「妙に信憑性があったんですうー、付喪神だつて居るんだから学校が怪異になったつておかしくないんですうー」

「何その語尾、ウケるんだけど。つてか、この学校創立十七年なんだから。もつと年月が経たないと付喪神になんてならないんですうー」

そんな帰り道があつてから、何故か彼女と仲良くなつてしまったのだ。

今でも本名がミユキだったかミキだったかあやふやなのでみっちゃん、と呼んでいる。彼女は自分の渾名に因んだのか、私のことをりっちゃんと呼ぶようになった。

だから私は知らない。

あの階段が百四十八段あるということを、学年新聞の学校の名物紹介欄にて知ったことを。

あの夕暮れ色で自分の影を探した時にみっちゃんともう一人、長い髪を靡かせる人らしきナニカの影を見たことを。

みっちゃんは良い友人だ。

その悪癖に目を瞑り、時には乗りこなす度胸は必要かもしれないけれど。

式 時間を間違えると吉

同じクラスのみつちゃんはウソつきだ。

それに気付いて早数ヶ月の時、私とみつちゃんは二人だけの勉強会を図書館で開いていた。

私たちの学校は図書室のことを何故だか図書館と呼ぶのが習わしである。

「勉強しなよ」

「うーん、休憩?..」

横目で地震展のポスターを眺めながら大鯰をルーズリーフに描いてた手を止める。鯰の上で大小様々の家が揺れていた。

しようがあるまい。私は三日坊主の達人なのだから。

「そんなんじや受かるもんも受からんよ」

「大丈夫、大丈夫。受かるだろうよ」

「頭自体は悪くないのに」

なんて、残念な。とみつちゃんは私にコメントした。

「どうもマジメに勉強していたみつちゃんは、宿題が終わって次をやらずにぼんやりしていた私の素行が目に残ったらしかった。

「えー、初夏だもんよ。そんなにカリカリ勉強してたら熱中症になっちゃうよー」

「それはりっちゃんだけの現象だと思うよ。それに今日はサマータイムとやらで六時には下校しないとバスも無くなっちゃうんだから」

「月日に関守なしてねえ」

みつちゃんもケラケラ笑う私を横目に見ながら手を止める。

「どうやら彼女は生物の作文問題に悩まされているようだった。指を葉がわりにしていた教科書を何度も問題文と見比べている。」

「やがて問題文が勝ったのか、みつちゃんは教科書を軽い音と共に閉じた。」

「お、キリがいいのかしらと声を掛けてみる。」

「もうすぐお八つ時だからさあ、お茶でもしばいようよ」

「わたしは熱いお茶よりアイスかな」

ぐだぐだと休憩を勧めてくる私に優しいみつちゃんは負けてくれるのか、二人で財布を取り出しながら購買に向かうことにした。

蒸し暑い中、私は結局冷たいほうじ茶を飲んだ。夏には全く売れないのか、温かい飲み物は売っていなかったのだ。

みつちゃんは私の隣の席でスーパークップのバニラをちびちびと木ベラのスプーンで食べていた。

蝉の音が何十奏にもなっていてどうにも煩わしかった。

「蝉がうるさいねえ。もう少し少なけりや風流だと言えたのに」

「毎年こんな風に五月蠅いよ。結婚相手を探すのにご苦労なことだね」

みつちゃんの冷静な感想にもお構いなしに蝉は五月蠅い。

夏の風物詩の一つなものだから、これもまた風流なのだろうと少し納得して、その気持ちを固めるように少しばかりぬるい麦茶を喉に流し込んだ。

そうこうしているうちにアイスを食べ終わった彼女と一緒に図書館まで戻ることになった。

気分転換をしたにも関わらず、うだうだと机に突っ伏した私を見かねたのか、みつちゃんもやる気を無くしたのか、周りに人が居ないのをいいことに口を開き始める。

「この時間が一生続けばいいって思ったことってある？」

「たまーに」

「じゃあ、探してみようか」

何を？ と聞くと本、と簡単に答えが返ってきた。

「四時四十九分四十九秒に図書館の何処かに隠されている本を開いた時、永遠にその時間が続くんだってさ」
なあにそれ。

高校の図書館で聞くにはあまりに陳腐な怪談に思わず苦笑が漏れた。

「本は物語を紡ぐもの、時計は時を刻むもの。この二つが合わさっ

たんだから、この『物語』をこの『時間』に留めることだっってきたと出来るんじゃないのかな？」

馬鹿馬鹿しいと一笑に付しても構わないような話なのに、真剣な顔をするみっちゃんを見てみると、どうにもそういった思考が鈍る。

そして、こういった話が意外と好きな私は簡単にいいよ、と返してしまうのだ。

とは言っても、何の手がかりもなく本を探すなんて無理である。みっちゃんによると見れば分かるそうだ。何とも適当な話である。

キョロキョロしながら本の本棚を縫うように歩いていると題名も著者名も見当たらない、真っ黒な表紙の本が見つかった。

「みっちゃん！ これかなあ」

「うわ、見事に真っ黒」

そう言つて彼女はペラペラと無遠慮にページをめくつた。紙が薄いのか、次々と捲れていく紙を目で追っていると、あるページでピタリと止まった。

細々と文字が書かれているそのページを、みっちゃんの横から身を乗り出して読んでみることにする。

「二人だけの勉強会を図書館で開いたものの、些かやる気に欠けた片方は地震展のポスターを横目に大鯰の絵をルーズリーフの片隅に書いていた——」

この一文から始まる文章は、間違いなく私とみっちゃんのこの午後イチの行動だ。

さつと顔が青ざめる。

みっちゃんがぼつりと私に問い掛けた。

「今何時？」

「四時四十九分四十九秒」

丁度の時間だった。

話は本当だったと、血の気がサーッと引いていくのを感じる。

突然、パタンつとみっちゃんが本を閉じた。

それを皮切りに、まるで金縛りが解けたみたいに私の足がたたらを

踏む。

みつちゃんはそれをそのまま無造作にズボツと本棚に仕舞うとトコトコと歩き出していく。ぎぎつと椅子が嫌な音を立てながら引かれて、みつちゃんが座った。

それからため息なのか何なのかよく分からないものを一つ吐くと小首を傾げて言う。

「ウソだよ」

「は？」

「だから、ウソ」

なんで、としか言えなかった。

「さっきの話はりつちゃんが余りにも勉強しないでダラダラしてるから、ちよつとお灸を据えようとしただけの作り話。あの本は……ダミーって知ってる？ この学校、作られてそこまで経ってないからさ、本棚の隙間を埋めるためにダミーの、中は普通のノートみたいになってる本を置いてるの。あれをさっき少し拝借してりつちゃんの様子をわたしが書いてたってだけだよ。びっくりした？」

「した」

呆然と目の前の彼女を見つめる。完璧に騙されてしまっていた。

みつちゃんはニンマリ笑って言う。

「時間は止まらないんだから、りつちゃんも手を止まらせないの」

「わかったよ」

彼女に一本取られた、という訳である。何だか悔しくて、宿題の数Ⅲの演習問題を予定したよりも五問多く解いて憂さを晴らすことにした。

一方、みつちゃんは生物の作文問題を諦めたようで、有機化学相手にあれは違うだのこれは違うだの、うんうん悩んでルーズリーフがたくさんの六角形で埋まった。

そして、一時間ほど勉強をした後、下校時間がとつくに過ぎていることに気付き、バスが来ないことを嘆く羽目になった。

だから私は知らない。

あの時、蝉の声が聞こえなかったことを。

図書館にダミーの本は置いてあるものの、それは開ける仕様になっていないことを。学校の図書館で働いている馴染みの司書さんに聞いた時に「いたずらされちゃ大変だからね」なんて教えてもらったのだ。

あの時、時計をすっかり読み間違えていた私は五時四十九分四十九秒を四時四十九分四十九秒だと思い込んでいたことを。

参 9割はこうして失敗した

同じクラスのみっちゃんはウソつきだ。

彼女のウソに胃を痛めないようになった頃。

生物の授業で、ある実験をした時だった。

担当教諭の笹本先生は気の抜けた炭酸みtainな話し方をする人で、授業がいつも面白い。

生物を教える先生は皆何故か面白い、というのは私が作ったジンクスだ。

数年前、まだ中等部の生徒であった時、部活の顧問であった沖田先生はやはり生物の先生で。カエルの幼生について話を聞いた時に「ティ○カールベルじゃないよ、幼生だよ」だの、生物の変態の流れを教わった時に「春先によく湧いて出てくるアレ……あの、お巡りさんにお世話になる方々ではないよ？ それにしても困るよねえ。啓蟄辺りに虫と一緒に湧いてくるのかな？」だの。やっぱり面白い先生であったことを思い出す。

でも、先生がそうやって講釈をする時、笑っている人は私以外誰一人としていなかった。皆が真面目すぎてそういう冗談がすべて流されたのか、それとも私自身の笑いのセンスがかなり独特なのか分からなかった。もしかしたら両方かもしれない。

神経の分野を勉強していたのだが、皆の集中力が途切れてしまったのか、はたまた話のネタがこれしかなかったのかわからない。ただ、もう少しでお昼ご飯というところであったので、皆空腹で気もそぞろであったのは事実だ。

皆の集中力を取り戻すためにはやはり手を動かすのが一番だろう、とのこと、紙コップに静電気を溜める方法を笹本先生が話し始めた。

紙コップを2つ重ねて、アルミホイルで包む。それから下敷きやらバールンアートで使用する風船やらを使って静電気を溜めて行くの

だ。その静電気を使って、皆の神経伝導の速度を測ってみようという話になった。

さすがに静電気だと痛いし、実験のための用意もないとのことであつたので静電気を通す代わりに、手をぎゅつと握ることにした。

まず、教室の各々の席に座って目を瞑った状態で皆前後の人と手を繋いだ。私の席は四列目の一番最後だったので、お隣のみっちゃんと手を繋ぐことになる。

やがて皆の手が1本に繋がって。1番端っこの人が先生の合図で繋がれた手をぎゅつと握った。手の刺激は繋がれた手から手へと移っていつて、その刺激が伝わったもう一方の端っこの人が手の代わりに握られたストップウオッチを押しした。

記録は8・70秒であつた。先生が凄く早いんだねと少し驚いたように言う。

「皆若いから神経の伝導も速いのかねえ」

「いや、そんなことないでしょ」

残念ながら皆が若いから説はみっちゃんにはつきりと否定されてしまった。

この授業を受講していた人数は31名だったので、1人当たりの神経伝導速度を皆さんお馴染みの速度計算（小学生の時、『キ』ミの『ハ』ートに『ジ』ヤストミートで覚えさせられた）で求める。

「あれま、見立て違いだったみたいだ。皆、本当に31人だよな？」
伝導速度が先生の予想よりも遅かったらしく、先生が何度も私達の人数を数えた。クラスの皆も一樣に首を傾げて人数を数え直す。高校の授業だけあって、やはり人数を余分に数えていたり、逆に少なく数えたりはしていなかった。

その上、小学生の頃にイヤという程使った速度の公式である。小学校、はたまた中学校でも追いかけて回されたからもうDNAの奥深くまでに刻み込まれているだろう。

その上、皆、理系を選択しておいて今更そんなところで躓くはずがない。

つまり、計算間違いの線は消えていた。

皆頭の上にハテナを浮かべながら、授業終了の鐘が鳴ったので解散することになってしまった。

完全なる時間切れ、というやつである。

釈然としないながらも、お弁当のエビフライを口にすることにした。

「それは、先生が人数間違えたんでしょ」

やっぱり何だかおかしかったよねえ、とみっちゃんに話を振ってみると、あっけらかんと彼女は言った。

「いや、皆でも数えたじゃん。31人ぴっぴりだったよ」

「だから、もう1人いたじゃんか」

「は？」

「皆が目を閉じてる中、私、薄眼を開けていたんだよ。その時に、もう一人、間に割り込んでたじゃない」

信じられないことを彼女は言った。「気付かなかった？」なんて余計な一言を添えて。

思わず少し乱暴に聞き返してしまったが、まあ仕方がないと思っ

た。算数の話をしている時にいきなりその対極の位置にいる幽霊を割り込ませてきたみっちゃんがいけないのだ。

「そんなのがいたら、その割り込まれた2人が気付かない筈くない？」

「あのさ、思い出してごらんよ。先生の指示、手繋ぐのと目を閉じるの、どちらが先だった？」

そう言われて回想する。確かに私達は先生の指示に従って目を閉じて、手を繋いだ。

そう、目を閉じてからだ。

授業だとか、学校にそんな失礼な部外者が入れるはずがないのだのという事は横に置いておいて、可能か不可能かというところである。

「それに、りっちゃんとわたしでも手なんて繋いだこと、今までにあっただけ？」

「みっちゃんと手を繋いだ記憶なんぞ、あの生物の授業しかないではないか。」

幼稚園でもあるまいし、友達と呼ばれる関係であつても手を繋ぐというシチュエーションは余りないと言えるだろう。

「案外、気付かないものだよ。それが誰の手か」
そう言つて、みっちゃんは笑つた。

「え、じゃあ、もう1人いたから結果がああなつた？」
自分の声が微かに震えるのがわかる。

案外、ビビりで気の小さい人間なのだ、私は。

「だと思ふよ？」
と彼女は締めくくつた。

その後、一拍置いてからみっちゃんはニヤリと笑う。

友人の笑顔に対して随分と失礼な感想だとは思ふが、あ、嫌な予感がする、と思つた。

「なんてね、ウソだよ、ウソ。幽霊が現実の人間に干渉できるわけないって！しかも、結果だつてただ単に皆のチームワークの問題でしょ」

わたし達のクラス、統一感がないものね、と。

私の怖がりようをみて、ついに笑いが堪え切れなくなったのか、息絶え絶えにしながらみっちゃんは言つた。

「なあんだあ。毎度毎度騙すようなマネして、酷いわ！私はビビりなんですぅ〜」

「語尾が独特過ぎますぅ〜」
どうやらやはりウソだつたらしい。

怖がり損をしてしまったなあと頭を掻いた。

怖がる、というのも意外と体力を消耗するものなので、あまり怖がりたくないものだ。

だから私は知らない。

いつも教室の隅に茫然と突っ立っている、点呼を何故か取られないどこかモノクロな同級生がこの実験に参加していたことを。

32名で計算すると、先生が最初に見立てた通りの丁度良い数字になることを。

肆 運命の人との出会い方

同じクラスのみつちゃんはウソつきだ。

彼女のウソに諦念を抱いていた頃、私は彼女の「ウソつき」以外の悪癖を知った。

午前三時といえれば何を思い浮かべるだろうか。

草木も眠る丑三つ時、または丑の刻参りなんて物騒なことを考える人もいるだろう。

私はそのどちらでもない。私にとって午前三時とは布団という名の愛しの恋人と涙の別れを告げ、一日の行動を開始する時刻なのだ。ジリジリと時刻を告げる目覚まし時計を引っ叩かんとばかりに止め、洋服に着替えた時だった。

窓の方から小鳥が嘴で突くような音が断続的に二度三度程響く。時刻が時刻なので震える手を激励しながらカーテンを引くことにする。窓ガラスが少し傷付いているのが見えた。

目を凝らしてその先をよくよく見てみると、暗がりの中からみっちゃんの姿がぼおつと浮き上がる。

此方に大きく手を振っているみっちゃんは午前三時に突っ立っていると見えなくらいに元気そうだった。

「何で私の家を知ってるの?」

「年賀状?」

今年の年賀状をぴらぴらとさせるみっちゃんに私は脱力した。

「まあ取り敢えず降りてきなよ」とジエスチャーで伝えられる。

もう春とはいえ夜、特に深夜はとても冷えるので上からコートを羽織ることにした。

思えば毎日この時間帯に起きている癖に窓の外を気にしたこともないし、親に行先を告げずに何処かへ行ったこともなかった。

たまには何処かの不良よろしく盗んだバイクで走りだしてみようか。もう十六の年は十日かそこら前に更新されたけれど。十数日の誤差くらい、この際関係ないだろう。

隣に並んだ時のみつちゃんの身長はやっぱり私の10センチ上だった。

「何の用事があるのよ」

「この先にある神社。りっちゃん早起きじゃん？ 丁度進行方向に家があったから一緒に行こうと思って」

お婆ちゃんだねえ。なんて言われる。そうは言っても、みつちゃんも早起きだと言いついたら「昨日から寝ていないんだ」とあつけられんと言われてしまった。

不眠症というやつではないのか、それは。

何でもその神社では変な現象が起こるらしい。

「何が起こるんだって？」

「何か絵馬に変な文が書いてあるらしいよ。まあ、オカルト板に書いてあるだけだから信憑性はあんまり」

「いや、変な現象やらなんやらに信憑性求める方がおかしいでしょ」「それな」

2人して面白いのかよく分からない話をしながら歩く。

閑静な住宅街なので人通りはなく、たまに車が走る音がするくらいだった。

クイーンビーが下級生に向かって「この泥棒猫！」と罵っているのを見たとか、ジョックがその後行方知れずだとか。どこの昼ドラマも、今ドキそんなベタな展開は視聴率が取れないだろう。

私自体スクールカーストという言葉は知っていたが自分の学校にそのような制度があることは全くもって知らなかった。

みつちゃんによると私は「誰とでも話す」人間に分類されているから、らしい。確かにそこら辺の人と適当に話すことが多い。そもそも階級のようなものを意識的にせよ無意識的にせよ作る方がばかばかしいのだ、だなんて開き直ってこれからも知らないふりを貫き通すことに決めた。

特に意識したこともなかったので、これからも意識することなどないだろうし。

そうこう言っている内に件の神社に着いてしまった。

「ところで変な文って何？」

「うーん。見ればわかるんじゃないかなあ」

適当なことを言いながら絵馬掛所を見る。

「A君と両思いになりますように」という可愛らしい願いから「世界平和」というスケールが大きいものまで筆跡様々に色々な願いが書き連ねられていた。

その中にふと異様な雰囲気を持つ絵馬を見つけた。

「いつか うめんいひのと と だまあえすうよに」

何だかおかしい。

その絵馬を凝視していると、みっちゃんに肩を叩かれた。

「順番、入れ替わってんじゃない」

そしてボソリと言われる。

瞬間、ゾツとした。

「えっ、えっ、何これ」

パニックに陥った。そりや、人間誰しも普通ではない文字配列で作られた文章を普通に認識出来たらとても怖いと思う。

どこからか、鐘の鳴る音が聞こえた。鳴らしているのは多分神社のものじゃない。もつと甲高くて重量の感じない音だ。

後ろを振り向けば人。

白粉でも塗ったのか真っ白な顔に真紅の唇。瞳が爛々と輝いて見えた。首にびたりと沿う着物が昔の時代劇を私に連想させる。歩きにくそうだなと現実逃避に考えた。

「走るよ」

みっちゃんは短く私に指示を出して走る。運動靴しか外履きを持っていなくて良かったとこの時ほど思ったことはない。

逃げるのにこれほど適した靴は無いだろうから。

血を取り込んだような朱を誇る神社の鳥居を出てから大きく迂回する。3つ目の角を曲がって駄菓子屋さんを右に曲がって細い路地裏に出た。

「撒けた？」

「多分？」

大きく息を吐き、また吸う。運動不足のこの身はひどく重い。草履の音はいつまで経ってもしなかった。

「モノホンと鉢合わせちゃったよ」

「は？ どう言う意味？」

「変質者」

たまに居るんだよねー、とみっちゃんは困ったように笑った。

春の風物詩でもあるそれは心霊物と切っても切り離せぬものなのだという。

「もう一生夜中に出歩かないからあ」

変な絵馬も見つけてしまうし。

「ゴメンね、絵馬はウソ」

やはりテヘツとみっちゃんは言った。可愛くなんてないからな。

そうやってみっちゃんは鞆をゴソゴソやって絵馬を出す。

先程のものと文言が一緒だ。

「最初と最後の文字さえ合っていれば人間ってきちんと読めるらしいね」

気になってしまったらしい。

それで、脅かすついでに私を神社に誘った……と。

「宿題やる時間があと二時間しかないじゃんか！ バーカッ！」

「ごめん、ごめん。でもあと二時間もあるよ」

「無駄にいい笑顔だなー」

日の出まであと少し。宿題の時間がこんな馬鹿みたいなことの為に削られたのが少し癢に触った。

しかし、ここ最近の運動不足が解消されたので結局許してしまう。

自室には辿り着いたものの、そのまま二度寝をキメた私は自業自得というやつだろう。

だから私は知らない。

あの神社は干支絵馬なこと。みっちゃんが持っていた絵馬のデザインが亥で、あれは子だった。

鐘を使う呪いは汎用性があること。恋人探しにも向くだろう、この世にいるのならば。

そして、左前のあの人は男だった、ということ。

伍 十円玉の使い道

「こつくりさん、こつくりさん、どうぞおいでください。もしおいでなられましたら『はい』へお進みください。だっけかなあ」

「うわあ、なにしてんの?」

同じクラスのみつちゃんはウソつきだ。

彼女のウソがある種の友情表現だと気付いた頃。

放課後、部活動に使うための資料を取ってくるために教室の引戸をガラリと思い切り開けた私は、珍妙な儀式を行っているみつちゃんと出くわした。

所謂、陽キヤと呼ばれる部類である彼女は本来、誰もいない教室でこつくりさんなんてやるようなキャラじゃない。

きつと、茜色に纏わりつかれながら、頭上で輝くLED照明どころか超新星爆発よりも輝いている他の陽キヤメンバーとゲームセンターにでも寄って、微妙にブサイクなマスコットを取るのに苦戦して、千円ほど無駄に遣いながらもそれをゲットする宿命にあるのではないだろうか。

「え、こつくりさん」

「知つとるわ! 何でそんなことしてるの。というかそれ一人寂しくやるもんじゃくない?」

そう、こつくりさんとは二人以上でやるものである。

電気も付けずに一人寂しくやるものではないはずだ。悪ノリを受け止めてくれる友人相手にキャツキャツと騒ぎながらやるものである。

「いやだなあ、りつちゃん。君がいるじゃない。それ、忘れていったでしょう?」

そうして指差されたのは私の机。

『これで君もキンギョマスター!!』と書かれた凶鑑が上に置かれていた。紛れもなく今まさに自分が取ろうとしていたものである。

そういえば、体育の準備体操をしている最中。みっちゃんに今日の部活動で持ち寄る資料がとても重かったのだと愚痴をこぼしたような気がする。しかも、結構値が張ったのだ。紙の枚数と値段はやはり相関係数にあるらしい。

その忘れ物を見たみっちゃんは私がここに取りに戻ることを当然の如く知っていたという訳だ。

物忘れをしたのが運の尽きというやつである。

よっこいしょ、と呟いてみっちゃんの対面に座ることにした。年寄り臭いぞ、と言いなながらも、みっちゃんは私にルールを確認し始める。

- 一つ、恐怖心や不安を抱かないこと
- 二つ、西か北の窓を開けて換気すること
- 三つ、質問の途中で指を離してはいけないこと

西に面した窓は開けられていて、カーテンの裾と一緒に、みっちゃんご自慢のひとつくりの毛先もふわりと浮かしていた。

「こつくりさん、こつくりさん、どうぞおいでください。もしおいでなられましたら『はい』へお進みください」

十円玉がするつと『はい』へ動く。余りにもスムーズに動いたため、私は小さな感嘆の息を漏らした。

「こつくりさん、こつくりさん。明日の天気は晴れでしょうか？」

十円玉は『いいえ』の周りをくるりくるりと旋回した。

どうやら明日は綺麗なお天道様を拝めないらしい。

「鳥居の位置までお戻りください」

十円玉が無事に鳥居の位置まで戻ると、みっちゃんに次は君だと目配せされる。

「えー、こつくりさん、こつくりさん。今日の夕食は何でしょうか？」

十円玉がゆつくりとひらがな表へと動き始めた。

「や」

「き」

「ぎ」

「か」

「な」

我が家の夕飯は焼き魚らしい。因みに私の好物ベスト3にランクインしている。

今の時期は鱈なんか私の好みドンピシャだ。

「鳥居の位置までお戻りください」

十円玉はスムーズに言う事を聞いた。

質問を一巡したのでそろそろお開きだろう。こういった降霊術の類を長時間やるのは少しいただけない。みっちゃんの方へ目を向けた。

「こつくりさん、こつくりさん。どうぞお戻りください」

途端、あんなに元気に動き回っていた十円玉が動かなくなる。さつきまで元気に跳ね回っていたのはどこのどいつだ。とツツコミたくなるのを抑えて今度は私が言ってみる。

「こつくりさん、こつくりさん。どうぞお戻りください」

その後、三回ほど同じ文言をみっちゃんとかわりばんこで唱えたが、こつくりさんが帰る気配はなかった。

「こつくりさん、こつくりさん。次の質問に答えることが出来なかつたら帰っていただけますか？」

みっちゃんが言う。そして、私に質問のパスを回した。

十円玉は『はい』の周りを猛烈な速度で旋回し始めた。随分と挑発されている……らしい。

「鳥居の位置までお戻りください」

十円玉はいっそ憎たらしいほどの素晴らしい動きで鳥居の位置まで戻った。

「こつくりさん、こつくりさん。一万八千七百八十二足す一万八千七百八十二はなんですか？」

こつくりさんの動きがピタリと止まった。

そこから出鱈目に『いいえ』やら『はい』やら『あ』だとか『さ』に移動する。道に迷ったような動きを繰り返していた。

分からないのだろう。なんせ算数の問題だ。

怪異、それも低級に計算が出来たら算盤の商売上がったのである。

「分かりませんか？」

みつちゃんも聞いても、十円玉は滅茶苦茶に動き回っているだけだった。

みつちゃんはそれをただ静かに見つめている。いつもニコニコと笑っている彼女にあるまじき、三角定規のような無表情であった。

「契約違反だ。白主の名において、お前みたいな低級は約束に従わなければ生きていられないだろう？ 去れよ」

みつちゃんがそう啖呵を切るとぴたりと十円玉が止まった。

やがて、ぷるぷると小刻みに揺れながら『はい』の位置で動かなくなる。

「「ありがとうございました」」

「いやあ、みつちゃんが言ってくれなかったら帰ってくれなかったかもしれないね」

おお、怖い。とカーデイガンの上から二の腕を擦る仕草をした。

「こつくりさんなんて、ウソだよ。いるわけないじゃんあんなの」

みつちゃんが笑う。今日の体育でシユートを上手く決めていた時よりもイイ顔してる。

「え、え、え。だって、え？ 動いてた、よね？」

「私が動かしてた」

「私の夕飯は？」

「テキトー」

「君が聞いた天気は？」

「お天気お姉さんが今朝のニュースで言った」

「どうやら全て彼女の茶番だったらしい。バカバカしいと思いがながらも質問を重ねる。」

「まじかー。計算、出来なかったの？ まじで？」

「まじまじ、あれ答えなんなの？」

「三万七千五百六十四（みなごろし）」

「は？ こわっ」

「二万八千七百八十二（いやなやつ）に一万八千七百八十二（いやなやつ）足したら残るは殺し合いでしょうよ」

得意気に笑った私にみつちゃんやんはドン引いた目をした。

失礼な。みつちゃんがついたウソの方が酷いはずだ。

資料を引つ張り出して、部室へ行ったものの、白板には「帰ってるね☆」の文字。

当たり前ながらも誰もいなかった。

結局、みつちゃんといつも通りに一緒に帰ることにした。

だから私は知らない。

今日の夕飯は鰯の干物だったこと。

お天気お姉さんが今朝ニュースで言っていた、明日の天気は晴れが百パーセントの一択であったこと。

みつちゃんは暗算が大の得意で、大会での表彰経験があること。

結局、翌日の天気は登校するだけで靴下が濡れるような土砂降りだった。

陸 エレベーターでちよつとそこまで

同じクラスのみつちゃんはウソつきだ。

彼女のウソに幾分か慣れてきた頃。

体育の授業は大縄だった。どうも、私たちの今年の体育祭の学年種目は『これ』らしい。毎年、先輩方を見ていたので知ってはいたが、こうした種目をやるのは小学生以来である。

「りっちゃん……。そんなことってある？　大縄だよ？」

「しよがなくなない？　たかが大縄、されど大縄だよ？」

そう、久しぶりに大縄をした私は縄を跳んだその瞬間にギックリ腰になったのだった。

保健室の先生には「赤ちゃんからご老人までなるから気にしないで大丈夫よ」と優しい言葉を掛けてもらったものの、痛いものは痛いし、お婆ちゃんだと言われればもう甘んじて受け入れるしかあるまい。

小中高生はそういった年寄りネタが好きなのだ。二十五歳のまだ年若く、花盛り中の花盛りである女性の教師を『ババア』とあげつらい、悪口を言いまくるくらいには。

失礼なことである。

数学を教えるその先生の他は年が近いといえる先生がいないからいじりたくなるのかもしれないが、言っている彼ら彼女らも後七、八年したら同じ年になる癖によく言うものだ。

「荷物、これだけでいいの？」

「荷物は大丈夫。ありがとう。悪いけど図書館寄ってもいい？　返却物あるんだ」

みつちゃんは快く頷いてくれた。

けれど、ここは一階で図書館は同じ棟の三階に位置する。一応、階段を使おうと足を動かしてみたものの腰に響いた。

結局、エレベーターを使うことにした。先生、又は足を負傷した生徒用のエレベーターなので、足に怪我を負ったわけでもない自分が使うことに少しの罪悪感を覚えたものの、みつちゃんは使用感を確かめ

る大チャンスだと私を狭い箱の中に押し込んだ。

数秒で図書館のある三階に着く。返却ボックスにひよいと本を入れて、ポップでお勧めされていた本を借りた。図書館の入り口で佇んでいたみっちゃんのところへ腰をかばいながら戻る。

「終わったの？」

「うん」

じゃあ、遊ばない？ とみっちゃんは言う。

遊ぶと言ったって、学校周辺には畑と田んぼしかないし、学校外の知り合いと言っても案山子ぐらいだ。

ついでに今の私はギックリ腰で腰を痛めている。校庭で遊ぶのは無理があるだろう。

「いいけど、何するのよ？」

「エレベーターを使うんだよ」

どうにも、異世界へ行く方法とやらを試そうということらしい。

丁度放課後で、教師たちも職員会議で職員室に缶詰め状態を免れない上に、私の怪我の功名とやらでエレベーターに乗っても怒られない。何という好都合なのだろう、とのことだ。

持っていたスマホで検索してみると、異世界訪問のために使うエレベーターは、十階以上必要だそうだけれど。

しかも、一人でやろうという気はさらさらない。

「うちの学校のエレベーター、四階までしか行かないよ？ しかも四階は屋上への入り口だけしかないし」

「四イコール死。みたいな言葉遊びもあることだし、アレンジしてみよう。どうせお遊びなんだしさ」

それもそうである。そもそも、一人だという制約があるのだ。それさえも破ろうというのにエレベーターの表示階数くらいなんだと言うのだ。

早速、一階に戻ってからまた乗り込む。

四階、二階、三階、二階、四階に移動する。

移動のボタンを押すのはみっちゃんが買ってきて出てくれた。

「エレベーター、きれいだよねえ」

「バカ高い学費払ってるんだから、設備くらいはきれいでいてくれないと」

ぼつりぼつりと雑談を交わす。

幸か不幸か、エレベーターに乗り込んでくる人物は誰一人いなかった。

「次、五階だつてさ」

「無いしなあ。二階でいっか」

みつちゃんの指が二階のボタンを押した。

「女性が来るんだっけ？」

「人間じゃないやつね」

「知り合いだったらどつちにしろアウトだね」

ぼそぼそと話し合つて、無意識に段数を数える橙色の光を目で追つた。

どうしてもエレベーター内ではぼそぼそとした声でしか話せない。

声が大きいかだと自認する私としては珍しいものだ。

二階に到着する。音もなくエレベーターが開いた。

女性が堂々と乗ってきたのに驚く。

軽く私の肩が震えた。その震えは腰に響いて、ううつと唸る羽目になつた。

腰痛は死ぬほど痛い。

会釈をした女性はよく知っている人——Z先生である——だった。

まだ年若い先生で、小柄な人だ。眉下で切られた重たい前髪、化粧つけないその顔、モノトーン調のスーツ。何処かの寡婦のようだった。

いつも悪口を言われている理由はその格好もあるのかもしれない。この人の倫理の授業はきめ細かでもとても楽しいのに。もったいないことだ。

まあ、話さない訳にもいくまい。無視なんてしたら明日も学校へ行くのに気まづくなってしまう。

「先生、何階です？」

「一階をお願い。あら、怪我？ 大丈夫なの？」

「腰をやつてしまいました」

「あら、それは大変ねえ」

みつちゃんは一階を押し下り黙ったままだ。お遊びに失敗して少しすねたのだろうか。

そんなことでいちいち神経を尖らせるような友人ではないはずなのだが。

彼女は先生の授業を取つていなかったつけと思ひ返してみても、彼女は確かにクラスの後ろの方の席にいたはずだ。そりゃ、何か話すまではないかと思ふけど挨拶くらいはしなくてはならないのではないか。

一階に着き、先生が降りた。

なにせよ、私たちのちよつとしたお遊びも失敗と相成つたのだ。

そう思つて、一階に踏み出そうとした瞬間、みつちゃんに手首を掴まれる。

「降りないの？」

「どうせなら最後までやっちゃおうよ」

まあ、いいけど。

扉が閉じた。

みつちゃんが四階を押し下る。

密室にこうして閉じ込められるのは少し苦手だ。それに私は飽きるのも早い。

腰痛と相俟つて口数がさらに少なくなった。

そして、四階に着いた。

エレベーターの外は真っ暗だった。廊下の伸びたその先にはポツリと屋上に繋がるはずの扉がうすらぼんやりと浮かび上がるだけ。

「めつちや静かだね」

しーん、という音が聞こえてきそうなくらいに静かだった。ついでに言うと、みつちゃんも黙ったままだ。

「みつちゃん？ おーい？」

声を掛けても無視。隣に変わらずみつちゃんはいたものの、無言で

ある。

十センチの差があるこの身長、その上背を伸ばそうものなら今度こそ確実に腰が死んでしまう。彼女の表情は窺えなかった。

やがて、みつちゃんはエレベーターのボタンを押したのか、扉は閉まり一階へと降りていく。何十秒かでしかなかったが、一階に着いた途端にロビーへ飛び出した。

「え、え？ 異世界行っちゃったかんじ？ みつちゃん黙ったままだったし？」

ギックリ腰を考慮しなかった私は飛び出した瞬間、あまりの痛さに軸がぶれ、転ぶ。

四つん這いのまま、みつちゃんに向かって叫んだ。地声でもうるさいと言われることのあるその声はエコーがかかって四方八方に散った。

みつちゃんはそんなみじめったらしい姿の私に笑う。

「ウソだよ」

「は？ また？ どこがよー」

「階数足りてないし、一人だけじゃないし。そもそも成功するわけないじゃん」

「四階！ めっちゃ静かだったよ！ 暗かったし！ みつちゃん無視するし！」

「十六時半には電気消えるんだよ。しかも屋上なんて行く生徒、うちの学校にいる？」

只今の時刻、十六時三十二分。

確かに屋上に用がある生徒はいない。あそこには何もないからだ。たまに告白だのなんだので盛り上がっていることもあるが、あそこは監視カメラど真ん中である。用務員さんが苦笑いしながら教えてくれたことを思い出した。

「まったくたまましたなあ！」

拳を振り上げる私にみつちゃんはやっぱり笑う。

意地の悪いことだ。

質問には答えてくれなかったが、きつと怖がらせるために無視だの

なんだのしたんだろう。

彼女は私に手を伸ばしたが、それを断って一人で立つ。

それでも、彼女と私は友達なので一緒に帰ることにした。

だから私は知らない。

この学校のバスケットボール部は屋上を練習拠点にしていること。

屋上に繋がるあの短い廊下は自動点灯になっていて、エレベーターが着いた瞬間には点灯すること。

僅かに腐臭のした、Z先生とは誰なのか。